



## Osaka Gakuin University Repository

Title	前置詞への用法依存アプローチ A Collocation-based Approach to Prepositions
Author(s)	黒宮 公彦 (Kimihiro Kuromiya)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 70 号 : 1-24
Issue Date	2015.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

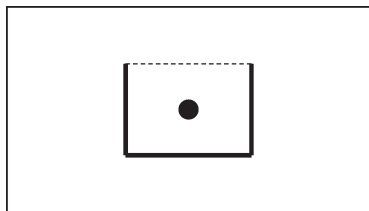
# 前置詞への用法依存アプローチ

黒 宮 公 彦

## 1. 前置詞の中心義を考えることに意味はあるか

認知言語学の分野における英語の前置詞の研究というと Tyler and Evans (2003) が名高い。これは人間の空間認知を前置詞の意味の基盤とし、その上で前置詞のプロトタイプの意味（厳密には「意味」というよりは「人間が認知した状況」であるので、Tyler and Evans (2003) では“proto scene”と呼ばれている。例えば in の proto scene は(1)に見るようなものとされている）を考察した上で、その中心義から周辺的な意味への派生関係を分析した研究である。その一方で空間認知とあまり関係のなさそうな前置詞については触れられていない（もっとも英語の代表的な前置詞のほとんどに触れている）。

(1)



(Tyler and Evans 2003: 184)

このような研究は貴重で重要なものであろう。しかし、前置詞の習得に苦勞している日本の英語学習者を見るにつけ、さらにまた筆者自身もかつて苦勞した経験があることを思い出すにつけ、疑問に感じるものが二つある。一つは、このような中心義を知っていればその前置詞の全ての用法が予測できるように

なるのだろうか、言い換えると、ある前置詞を身に付けるとはその前置詞の中心義を知ることを意味するのだろうか、という疑問である。そしてもう一つは、第一の疑問とも関連するが、ある前置詞が用いられる際には、それがいかなる用法であっても、ネイティヴスピーカーの脳裏にはその前置詞の（単独の）中心義が（必ずしも(1)に見るようなスキーマではないのかもしれないが、いずれにせよ何らかの心的実在性を持ち、かつネイティヴスピーカーであれば誰もがほぼ同様のものを思い浮かべるような普遍性を持った存在として）思い浮かべられているのだろうか、という疑問である。

慌てて付言しておかねばならないが、Tyler and Evans (2003) が扱っているのは中心義ばかりでなく、そこからの拡張についても詳細に論じている。中心義だけで前置詞の全ての用法を説明できると主張しているわけではない。それでも上に述べたような疑問を抱かざるを得ない。なぜなら、おそらく英語学習者が知りたいことは「なぜ一つの前置詞に複数の語義が結びついているのか」よりはむしろ、英語を読む際に目にする前置詞が「いずれの語義で用いられているのか」、あるいは英語で書く（話す）際に「複数の前置詞のうちのいずれを用いて表現すればよいのか」であろうからである。これを(1)に見るような事態認知とそこから得られるスキーマ、そしてそれに基づく意味拡張で果たして説明しきれるものなのだろうか。

例えば場所を示す場合、比較的広い場所は *in*、比較的狭い場所は *at* で表すとよく言われる。ところが「(アパートの) 102号室に住んでいる」と表現したときは *live in room 102* と言い、*live at room 102* という言い方はふつうでないように思う。この理由をネイティヴスピーカーに尋ねたならば、おそらく次のような回答を得ることになるのだろう。すなわち、アパートの一室というのは確かに狭い空間かもしれないが、そこに住む人にとっては居住空間、言い換えるとその内部において「暮らす」という活動をする空間なのであり、だから *in* が適切となるのだ、と。これは非常に説得力のある説明であり、(1)のスキーマとも整合性が高い。しかし、これは我々がすでに *in* を用いるのが一般

的であることを知っており、受け入れているからこそ納得できるのであって、もし何も知らない状態で次のような説明を受けたのであれば *at* が正しいと十分に納得できるのではないか。すなわち、アパートという大きな建物があって、それをフレーム<sup>1</sup>として、その中で私が住んでいる部屋はどこかということ「102号室だ」と、大きな全体の中の一点を指し示す、だから *at* が適切となるのだ、と。

つまり、理屈など案外どうにでもつけられるのである。だからこそ非英語話者は *in* と *at* のどちらが正しいのか迷うのであり、*live through room 102* といったような明らかに誤りだと分かる表現で迷うことはないはずだ。明らかに誤っている表現は非英語話者にも誤りだと分かる、その点では非英語話者といっても事態認知に関して英語話者と大きな違いはないのであろう。しかし、*in* と *at* のように、非英語話者が迷うこともある。そして重要なことは、ある非英語話者にとって間違えやすい表現はたいてい他の非英語話者にとっても間違えやすいのであり、それにも関わらず英語を母語とする話者は間違えないということだ。これは何を意味するのだろうか。一つの考え方は、非英語話者が前置詞の使い方を誤るということはその人が前置詞の意味を十分に理解していないということであり、正確に理解していれば正しく使えるはずだ、ということだろう。しかし筆者はこの考え方には否定的である。この考え方に立つと「では前置詞の意味とは何なのか」が問題になるが、前置詞は様々な文脈で用いられるものであるから、それらの用法の全てに通底する中心義を求めようとすれば、それは(1)に見るような高度にスキーマ化されたものにならざるをえない。(1)はあくまでも Tyler and Evans (2003) が提案しているものに過ぎないが、それでも英語の母語話者でもある言語学者が提案していることも考慮すると、*in* の全ての用例に共通して認められる意味を最大公約数的に抽出して図示するならば、程度の差こそあれ(1)のようなものに落ち着くのではないか。そして(1)のような抽象化された図式が何を表しているのかと問われれば誰しも「何とでも解釈できる」と答えるのではないか。それはつまり、*in* と *at* のいずれが正

しいのかについて(1)の図式からは判断のしようがないことを意味する。(1)のような図式が表しているものなど何とでも解釈できるのだから、すでに述べたように、理屈などどうにでもつけられるというわけである<sup>2</sup>。

これは奇妙なことではないだろうか。英語の母語話者にしても、幼い頃から無数の実例を見聞きすることによって前置詞の意味を身につけたはずだ。ところが知っている実例が増えれば増えるほど、全ての実例に共通する意味は希薄になっていく。しかし実際には意味というものは見聞きした実例が増えるほど精密化されていくものではないのだろうか。

すでに述べたように Tyler and Evans (2003) は中心義ばかりでなく、その拡張についても論じている。しかし結局のところ、どのような状況で・どの前置詞を・どのように拡張して用いればよいのかが示されなければ英語学習者は前置詞を使いこなすことができない。意味の希薄なスキーマを中心義に据え、それが拡張すると述べるだけでは少なくとも非英語話者の学習の役にはほとんど立たないのだ<sup>3</sup>。

## 2. 前置詞への用法依存アプローチ

前節の問題に対して本稿が提案したいのは、前置詞の意味への用法依存モデル (usage-based model) に基づくアプローチである。用法依存モデルは Langacker (1990, 2000) などで提案されている考え方であり、端的に言えば言語に対するルールに基づく top-down 的アプローチではなく、用法に基づく bottom-up 的なアプローチのことである。これについて Langacker (1990: 265) は以下のように述べている。前節に述べたこととも深く関わっているため、少々長くなるが引用する。

(2) We know, for example, that speakers learn and manipulate specific expressions; but we do not know, in any direct way, precisely what degree of schematization they achieve, i.e. how abstract and general the rules are that they

manage to extract from more specific structures. I suspect that speakers differ somewhat in this regard, and do not invariably arrive at the highest-level schemas that the data would support. In any event, the omnipotence of high-level generalizations is not a matter of apriori necessity. Though regularities are obviously noted and employed in the computation of novel expressions, it is quite conceivable that low-level schemas are more important for this purpose than highly abstract schemas representing the broadest generalizations possible. If high-level schemas are extracted, they may be of only secondary significance, serving more of an organizing function than an active computational one.

要点をまとめると以下のようなだろう。前節でも述べたことだが、概念はスキーマ化が進むほど抽象的になっていくので意味が希薄化してしまう。ならば文の生成や意味解釈に直接関わっているのは抽象度の低いスキーマで、意味の希薄化した高レベルのスキーマは様々な用法全体に統一感を与える役割しか果たしていないのかもしれない。したがって語の意味記述のためには抽象度の低いスキーマを重視すべきなのだ、と。この考え方は前置詞の意味について考察する際にはとりわけ有益だと思われる。なぜなら、具体的な物体を表す名詞などとは異なり、前置詞の意味はもともと抽象的で、かつ様々な意味に用いられるので、前節でも述べたとおり、全ての用法をカバーするようなスキーマを考えようとするそれは(1)に見るような極度に抽象的なものとならざるをえないためである。

しかし、では前置詞の意味において「抽象度の低いスキーマ」とはいかなるものなのだろうか。本稿ではそれは、前置詞を含んだ「コロケーション」(collocation. Sinclair (1991)、Hunston and Francis (2000)、Stubbs (2002)を参照)あるいは「構文」(construction. Goldberg (1995, 2006)を参照)だと考えたい(ただし本稿では以下「パターン」という用語を採用することにした<sup>4)</sup>)。すなわち前置詞をパターンの中に置き、前置詞を含んだパターン全体

を一つのまとまり、言い換えると「意味の単位」だと見なすのである。

何らかの事態を言語で表現することには、認知主体たる話し手が、自身が世界を認知した、その捉え方を言語で表現する、という側面も確かにあるだろう<sup>5</sup>。しかし言語にとってより根本的かつ基本的なことは、周囲の人々が使用する表現をとりあえず受け入れ、そうした表現をそっくりそのまま自分でも使う、ということなのではないだろうか。そして「なぜそのような表現になるのか」については各人がその人なりの理屈をつけて納得しているということなのではないだろうか。例えば日本語の「待つ」は「友人を待つ」のように対格(ヲ)を取る。対格は英語では基本的に直接目的格に相当すると考えていいだろう。ところが wait は wait for a friend of mine のように for を取る。同じ人間が同じ事態を認知して言語で表現しているのにもかかわらず、この違いが生じるのである。しかも日本語の話者はみなヲを用い、英語の話者はみな for を用いるのであって、母語話者の間では個人差によるばらつきが(おそらく)ない。これは、日本語話者は「〈人〉を待つ」というパターンを一まとめとして記憶し、同様に英語話者も “wait for 〈PERSON〉” というパターンを一まとめとして記憶しているからだと考えられる。「記憶している」とはつまり周囲の人々が使用している表現をそのまま受け入れ、丸暗記した上で自身も使用するということだ。その上で日本語話者ならば「待つ」はなぜヲを取るのか、英語話者ならば wait はなぜ for を取るのか、各人が各人なりの理由付けをしている(なぜなら、「待つ」がなぜヲを取るのか周囲の人々は誰も教えてくれなし、それどころか正解を知りもしないだろうから、各人が自分で考えて納得するよりない)か、もしくは理由付けするのをあきらめて記憶した表現をただ使用するかのいずれかなのであろう。そう考えると(2)で見たように Langacker (1990) が “I suspect that speakers differ somewhat in this regard, and do not invariably arrive at the highest-level schemas” と述べるのももっともであり、それどころか— Langacker (1990) はスキーマの抽象度の高低のみを問題にしているようだが— ある表現に対する理由付けが個々人によってまるで異なる

ということすらあるかもしれない。少なくとも、たとえ日本語の母語話者であっても、「友人を待つ」と「ガラスを割る」とでなぜ同じヲが用いられるのかについて自明だと感じる人はいないであろう。ならば、理由ははたまた「待つ」がヲを取ることを日本語話者が受け入れているということが本質であり、「〈人〉を待つ」というパターン全体が意味の単位であると本稿は考えたい。そして英語の前置詞の意味を考察する際にも同様に、例えば“wait for 〈PERSON〉”というパターンを意味の単位と見なすべきだと考える。

実を言うと前置詞の意味に対して Tyler and Evans (2003) も用法依存モデルに基づくアプローチを採用しているのである。すなわち前置詞の意味は、その前置詞が用いられている表現が表す事態全体を見渡した上で考察しなければならない、という立場に立っている。だからこそ Tyler and Evans (2003) では認知言語学でよく用いられる「スキーマ (schema)」ではなく、すでに述べたように、proto “scene” という用語が使われている。この「前置詞の意味を理解するためには話し手が認知した事態全体を考察しなければならない」という考え方は極めて健全なものであろう。しかしながら、事態全体を一つのまとまりとして考察するのであれば、それに対応するのも「語」の意味ではなくパターン、つまり句、節、文といったものの意味でなければならないはずなのに、残念ながら Tyler and Evans (2003) ではあくまでも語としての前置詞の意味の考察に終始している。本稿が語のレベルでの前置詞の意味については考えず、パターン全体を一つのまとまりとしてその意味を考えるべきだと主張するのは以上の理由による。パターンから前置詞だけを取り出しても抽象度が上がるばかりで意味が希薄になってしまうからである<sup>6</sup>。

### 3. 考察

#### 3.1 具体例

抽象的な議論が続いたので、ここで具体的な例を見ておこう。前置詞 with の用法を支えているのは次のようなパターンだと考えられる。



- (3) a. with 〈PERSON〉 = 「その人物と一緒に」
- b. with 〈INSTRUMENT〉 = 「その道具を使って」
- c. with 〈CLOTHING〉 = 「その衣類を身につけて」

お断りしておくが、これは with の用法を網羅したものではなく、具体例を示す目的でほんの一部を挙げたものにすぎない。〈PERSON〉、〈INSTRUMENT〉のように上位概念を容易に名付けられるものや、パターン全体の意味が容易に特定できるものはいいが、以下に見るように困難なものもある。

- (4) a. with ease, with care, . . . = (ある種の) 様態を表す
- b. (all) right with, wrong with, the case with, . . .
- c. start with, begin with, end (up) with, . . .
- d. argue [compete, fight, . . .] with 〈PERSON〉

さらに言えば、例えば with 〈PERSON〉のパターンに当てはまるものが全て(3a)の例だというわけではない。(4d)のようなものは(3a)と意味が異なる<sup>7</sup>ため、別のパターンだと考えるべきである。

## 3.2 問題点

本節では本稿がこれまで述べてきた考え方の問題点について考察したい。

### 3.2.1

まず、一つの前置詞に一つの意味が結び付いているのではなく、前置詞を含むパターンの一つ一つに意味が結び付いているという立場に立つと、覚えなければならないパターンが増え—必然的に前置詞の数よりも遙かに多くのパターンを記憶しなければならないことになる—脳の負担になるのではないか、という反論があるかもしれない。この点については用法依存モデルの提唱者である

Langacker 自身もよく承知していて、Langacker (1990:264) では用法依存モデルを “maximalist” の立場に立つアプローチだと述べている。実のところ多数のパターンや言語表現を記憶することが本当に脳の負担になっているのかどうかは甚だ疑わしい<sup>8</sup>。実際に脳が大量の言語表現を記憶することで我々の言語活動が可能になっているのであれば、それを認めるべきであろう。

### 3.2.2

次の問題点は、英語の母語話者は果たしてこうしたパターンを別のものとして認識しているのだろうか、という疑問である。例えば (3a-c) はそれぞれ別のパターンだと言われれば非英語話者は納得するかもしれないが、英語の母語話者は実際にはこれらを全て “A with B = 「A が B とともにある」” という 1 つのパターンで捉えているのかもしれない。とりわけ衣類はある意味で「道具」と見なすことも可能であるから (3b) と (3c) は同一のパターンと考えてもよさそうに思われる。

この点について考えるために次の (5) を見てみよう。これは *Peanuts* という漫画から引用したものである。この漫画の主人公 Charlie Brown は今テレビを観ている。そこに電話が掛かってきて妹の Sally Brown が出る。Sally は電話の相手に向かって次のように言う。

(5) No, my brother can't come to the phone right now. He's watching TV with a stocking cap. No, he's not wearing a stocking cap. He's watching TV WITH a stocking cap! Oh, forget it!!

(*Peanuts*, January 29, 1989, in *TCP*, p.13)

これには説明が必要だろう。Charlie はストッキングキャップをかぶってテレビを観ているのではない。Charlie の傍らには愛犬の Snoopy がいるのだが、この Snoopy が頭からくるぶしまですっばりとストッキングキャップをかぶっ

ている — もしくは体全体がストッキングキャップにくるまれていると言った方がより適切な状態 — のである。なので傍目から見ると「Charlie はストッキングキャップと一緒にテレビを観ている」と表現しても差し支えない状況というわけだ。けれども電話の向こうにいる相手にはこれが見えないので、Sally の “He’s watching TV with a stocking cap.” という発話を当然「Charlie はストッキングキャップをかぶってテレビを観ている」と解釈する。このずれが読者の笑いを誘うわけである。

この例から、英語の母語話者は with a stocking cap という句について「Charlie はストッキングキャップとともにある」といった漠然とした解釈をしているわけではなく、当然のように「ストッキングキャップをかぶっている」と受け取っているということが分かる。それは言い換えると、母語話者は (3a) の “with <PERSON>” と (3c) の “with <CLOTHING>” を別の事柄だと捉えているということである。その上で “a stocking cap” が人物を表しているという文脈を与えられた時にのみ with a stocking cap という表現は “with <PERSON>” というパターンに当てはまると解釈され、そうでない限りは — stocking cap は帽子の一種なのだから — “with <CLOTHING>” のパターンに当てはめて解釈されるのである。

念のために言うと、(3a-c) のいずれにも共通する特徴から “A with B = 「B が A とともにある」” という上位パターンを抽出することは可能であるし、実際おそらく母語話者の頭の中では with の意味としてそのようなものが思い浮かべられているのだろうと思われる。これは (2) で述べられている highly abstract schemas もしくは high-level schemas の一例だと考えていいだろう。ここで注意すべきは、(2) でも指摘されているとおり、このような上位パターンが抽出された後も (3a-c) は不要になるわけではなく、母語話者が事態を言語で表現するには依然として (3a-c) のような抽象度の低いパターンが主役となっているのではないか、ということである。(5) はこれを実証していると言えよう。そうであるならば、(3a-c) はむしろ抽象度の比較的高いパターン

だとさえ言えるのである。“with a stocking cap”ならば通常は頭にかぶっている状態を表すが、“with (a pair of) stockings”であれば脚にはいている状態を表す。つまりこれらは異なった事柄を表しているのであるから、異なったパターンに属しているはずである。こうした抽象度の低いパターンが大量に記憶されており、我々の言語使用を支えていると筆者は考えたい。

読者の中には次のように反論したくなる人がおられるかもしれない。すなわち、with a stocking cap が頭にかぶっている状態を表すのは stocking cap についての知識から推論されることであって with の意味とは無関係なのではないか、with の意味に関しては (3c) の「with <CLOTHING> = 『その衣類を身につけて』」というパターンさえ記憶されていれば十分なのではないか、と。本稿はこの考え方は採らない。母語話者は何よりもまず、with a cap、with a stocking cap、with a baseball cap といった実際に用いられた表現を（おそらく多くの場合はそうした帽子をかぶった人を目にしながら）記憶していくはずである。その上でそれらの表現を通じて “with <CAP>” というパターンを（脳内に）創り出し、さらにその上位にある “with <HAT>”（この場合の <HAT> は頭を覆うためにかぶるもの全般を意味するとお考え頂きたい）といったパターンを創り出して、最終的に “with <CLOTHING>” にたどり着くのだと考えられる。そして、(2) でもほのめかされているとおり、そうした上位のパターンが抽出された後も抽象度の低い下位パターンや具体的な表現がただちに不要となって忘れ去れるということはない。記憶されていたものが突然消去されるというのはそもそも不自然であるし、一度も使用されることなく十分に長い時間が経てば忘れ去られることもあるのかもしれないが、接する機会の多い、頻度の高い表現や下位パターンはむしろ時とともにしっかりと記憶されていくと考えるのが自然である。加えて (2) でも述べられているとおり我々の言語活動においてより重要な役割を担っているのはこうした下位パターンである。以上の理由から本稿は “with <CAP>” といったような抽象度の低いパターンを想定することは無意味なことだとは考えない。

そもそも前置詞は語と語をつなぐ役割を果たすのだから、前置詞の意味には「前後にどのような語が現れるのか」、そして「前後にどのような語が現れたら全体としてどのような意味になるのか」が含まれていなければならない。それは言い換えると、前置詞の意味は文脈によって決まる側面が大きいということである。したがって前置詞を文脈から切り離し、それ自体の意味について考えることこそあまり意味のないことなのではないだろうか。つまり *with a stocking cap* という句から *with* の意味だけを取り出して考えることはできないし、またそうする意味もないと筆者は考える。そうであればこそ “*with* <CLOTHING>”、あるいはもっと抽象度の低い “*with* <CAP>” といった、文脈を考慮した具体的な下位スキーマを単位として前置詞の意味について考察するのが有効だと考える<sup>9</sup>。本稿は前置詞を語というよりは形態素に近いものとして扱っている、と言ってもいいかもしれない。

### 3.2.3

前節で挙げた、衣類はある意味で「道具」なのだから (3b) と (3c) は同一のパターンと考えていいのではないか、という疑問について答えて—もしくは反論して—おこう。本稿は前節で述べた理由により (3b) さえあれば (3c) は不要だとは考えない。どちらも必要なパターンだと考える。

ただしこれは (3b) と (3c) を包摂するパターンを想定する、すなわち衣類を広い意味での「道具」と捉えることによって成り立つ、(3b) と (3c) の上位パターンとしての “*with* <INSTRUMENT>” の存在を否定するものではない。このようなパターンを考えても構わない (ただしこの “*with* <INSTRUMENT>” はあくまでも (3b) の上位パターンであって、両者は意味合いが異なることに注意しなければならない) し、このようなパターンを (無意識のうちに) 思い浮かべている母語話者もいるのではないかと思われる。しかしながらいくつか注意すべきことがあるように思う。

第一に、(2) は “*speakers differ somewhat in this regard, and do not*

invariably arrive at the highest-level schemas”と指摘しているが、衣類を道具の中に含めた“with 〈INSTRUMENT〉”という上位パターンはこのような high-level schemas の例に該当する可能性があるのではないかと筆者は考える。つまり全ての母語話者の頭の中にこのようなパターンが存在しているという保証はなく、個人差があるかもしれないということである。衣類がある意味で「道具」と見なすことが可能だということは、ある意味では「道具」ではないということでもある。ならば人によって判断や感覚に差があったとしてもそれほど不思議ではない。

これと関連して、第二に、「衣類」解釈と「道具」解釈が背反だと考える必要はない。二つのイメージが同時に喚起されても構わない。例えば“keep an eye on something”という句の on について考えてみよう。

- (6) a. keep on, go on, from now on  
b. She put her hat on. / The picture is on the wall.  
c. The wine is on the table. / The dictionary is on the desk.  
d. depend on, rely on

keep an eye on something の on は、ある意味で (6a) のような表現に見られる「状態持続の on」とでも呼ぶべきものだと思われる。しかし注視している物に視線があたかも貼り付いているようなイメージでこの句を捉えている人ならば、同時に (6b) のようないわゆる「付着の on」の例でもあると捉えている可能性がある。つまり複数のイメージが同時に喚起されているということだ。それはまた (6c) に見るような on の最も典型的だと思われるような用例でも同様である。ワインや辞書はテーブルや机の「上に」とあるともテーブル(机)に「くっついている」とも言えるし、テーブル(机)がワイン(辞書)を「支えている」とも言える(この「支える」イメージは (6d) のような例に反映されていると言えよう)。そしてワイン(辞書)がテーブル(机)の上

に載せられた状態は何かが起こらない限り「持続」するものだ。このように(6c)の **on** は様々なイメージで捉えることが可能であり<sup>10</sup>、それは他の用法も同様である。例えば(6a)の「状態持続の **on**」にしても、2つのものがくっついて離れず、動かないからこのような意味が生じるのだと考えればこれは「付着の **on**」の一種だとも言える。そう考えると一つのイメージでしか捉えられない例の方がむしろ一たとえあったとしても一珍しいだろう。このように、話者の捉え方次第で複数のパターンが喚起されることはあり得るし、それによって言語表現をより具体的で豊かなイメージで理解できるようになると考えられる。したがって我々が衣類を道具の一種だと認識する場合、「道具を広い意味で捉えたならば、衣類は道具の一種だ」と認識するというよりはむしろ、「衣類は衣類である」という認識と「衣類はある種の道具でもある」という認識とを両立させているのだと考えるべきであろう。

そして第三に、衣類を衣類本来の用途に使用しても一 道具を広い意味で捉えれば一それは道具の一種だと言えるだろうが、衣類を衣類としてでなく一つつまり本来の使用法を外れて一 純粋に道具として使用することも可能である。例えば“**tie his hands with a stocking cap**”のような例を考えればいいだろう。このように、衣類本来の用途はおおよそ決まりきったものだが、本来の用途を外れた道具として使用される場合の用途は多様であり、予想がつけにくい。文脈への依存度が高いと言い換えることも可能であろう。ここから分かるのは、一口に「衣類を道具と見なし、道具として使用する」と言っても、衣類本来の用途に用いるのとそうでないのとではそれに対する我々の認識が大きく異なっているということである。

前節で述べたことの繰り返しになるが、以上の議論により(3b)と(3c)とはあくまでも別のパターンであり、英語話者にとって両者はともに必要な知識だということが再確認できたことと思う。(3b)と(3c)を包含するパターンを想定することは構わないが、言語を運用する際に活用されるのは(3b)や(3c)、あるいはそれよりも抽象度の低いパターンだと考えられる。

### 3.2.4

用法依存モデルに基づいた、下位スキーマを重視する本稿は、いわゆる「語義の数え上げ (sense enumeration)」<sup>11</sup> の立場に立つものではないのかと批判を受けるかもしれないがそうではない。前置詞に限らず、「語の語義は一つ一つが独立したものであり、他と明確に区別できるものだ」とは筆者は考えないし、したがって語義を一つ一つ数え上げていくことができるとも思わない。しかし、語の中心義さえ分かっているれば他の語義の派生は規則として捉えられるという考え方も採らない。

例えば (4b) でも触れた **with** の用法について改めて考えてみよう。

#### (7) There's something wrong (     ) my computer.

この空所に **in**、**on**、**at**、**to** といった前置詞が入ったとしてもそれほど不思議ではなく、そのそれぞれに理由付けができるように思われる<sup>12</sup> が、実際には **with** が用いられる。英語史的な説明はさておき、英語を母語とする現代の話者の言語感覚という観点からこれが **with** でなければならない理由を果たして示せるのか、筆者は疑問に思う。これは名義論的な視点から見ての話であるが、逆に語義論的に見ても、**with** の最も基本的な用法が「(何かが) 何かとともにあること」を表すことを考えると、この **with** の用法は他の用法から予測できない特異なものだといえる<sup>13</sup>。こうした他の用法から予測できない用法を中心義の拡張によって説明しようとする試みは不適切であり、ただ記述する他はないという考え方を筆者は採る。(4b) のような **with** の用法があると知った上で後知恵的に説明を加えるのはたやすく、例えば中心義とその拡張による説明も可能だろうが、何も知らない状態であれば、たとえ母語話者であっても (7) の空所を埋める適切な語が **with** だとは思わないだろう。何も知らない状態でも適切な語は **in** でも **on** でもなく **with** だと予測できて初めてそれは真の意味での「説明」と呼べるはずだが、この意味での説明は極めて困難だと思われる。



る。そうであるならば説明ではなく記述をすべきだというのが筆者の考えである。

なお念のために付け加えると、語の創造性は当然認める。しかしながらそれは中心義ではなく、下位パターンに基づいて達成され则认为する。例えば **stocking cap** が何か知らなくても、それが身に着けるものだと分かれば、それと “with <CLOTHING>” というパターンとから、**with a stocking cap** という句の大まかな意味は理解できる。加えてもし “with <CAP>” というパターンをすでに習得しており、**stocking cap** が **cap** の一種だと知ったならば、両者を統合することでより正確な意味が理解できるであろう。さらに(5)で見たように、**stocking cap** が「**stocking cap** に身を包んだ人物」を表しているという文脈が与えられたならば、それと “with <PERSON>” というパターンとから、**with a stocking cap** が「**stocking cap** に身を包んだ人物と一緒に」という意味に解釈可能だということも理解できる。語の創造性とは、語の意味が高度に抽象的な中心義から自由に拡張していくというのではなく、このように下位パターンに基づき、具体的で豊かなイメージを伴った小規模な拡張が起きていくことで生じるものではないだろうか。

### 3.2.5

本稿のような考え方に立つと「ある二つの言語表現に同じ前置詞が用いられていたとして、なぜ同じ前置詞が用いられるのか」という問題は考察の対象外となってしまう。最後にこの点について述べておきたい。

すでに述べたように本稿の立場では “with a stocking cap” と “with Snoopy” とは — (5) で見たような特殊な文脈が与えられない限り — 別のパターンに属することになる。したがって例えば “on the table” と “on Saturday” も当然別のパターンに属することになる。しかし、ともに **on** が用いられるからには何らかの理由があるのだと考えられる。では本稿は両者の関係についてどう説明するのか。

実のところ、この問題は本稿がこれまで扱ってきたものとは別の問題であり、したがって別の角度から考察しなければならないというのが本稿の立場である。確かに *on the table* と *on Saturday* とでともに *on* が用いられることには何らかの（少なくとも歴史的な）原因があるのであろう。そしてこの原因を突き止めるには、“*on X*” という高度に抽象化された上位パターンを想定し、その意味を解き明かすか、もしくは *on* の意味変化を歴史的に観察し、いかなる意味拡張が生じたのかを考察する必要があるだろう。その一方で本稿の、抽象度の低いパターンを重視する立場は、現在の一つまり *on* の歴史的変遷に関する知識を持たない—母語話者の言語感覚を問題としている。解き明かそうとしている問題が異なるのであるから、本稿がその両方ともに対して満足のいく解答を与えることはできない。「*on the table* と *on Saturday* とはなぜともに *on* が用いられるのか」というのは、これはこれで興味深い問題であるから、本稿とは別の方法を用いて解明すべきであろう。本稿は下位パターンを重視する立場を採るわけだが、下位パターンの記述だけでは複数のパターン間の関係は見えてこない。複数のパターンの間に関係を見出すということは、言い換えるとそれらのパターンに共通する上位パターンを抽出するということであり、上位パターンについて考察することも重要である。要するに高度に抽象化された上位パターンは言語現象の「説明」—もっともこれは前節で述べた、真の意味での「説明」とは意味合いが異なるが—に有効であるのに対し、本稿が重視する抽象度の低い下位パターンは実際の言語使用に有効なのである。両者は両立するのであって、決して排反的なものではない。

念のために付け加えると、これは同時に以下のことを意味する。すなわち、もし仮に “*on X*” という上位パターンの意味を解明し、それによって「*on the table* と *on Saturday* とはなぜともに *on* が用いられるのか」という問いに対して解答を与えたとしても、そのことは母語話者が言語を使用する際にこの “*on X*” というパターンを（無意識のうちに）脳裏に思い浮かべているということを保証するわけではない、ということである。

#### 4. 最後に

「英語のある語を日本語に訳すと様々な訳し方ができるが、これは英語と日本語とのずれのために生じることであって、その語にたくさんの語義が結び付いているわけではない。母語話者の頭の中では語義は一つなのである。その一つの語義——つまり中心義——を正確に捉えることが英語の学習であり、そのためにも中心義を正確に記述するのが英語学の役目である」、従来はこのような考えられることが多かったように思う。この考え方はある程度は正しく、とりわけ名詞に関しては当てはまることが多い。しかしながら、本稿で確認したように、前置詞のような機能語は、たとえ中心義があったとしても、中心義の記述だけでは実際に使用できるようにはならない。また語の意味を「中心義とその拡張」という形で記述しようとする立場にしても、どのような状況でどのような意味へと拡張するのかが分からなければ実際の使用のためには不向きだと言わざるを得ない。

本稿はこのような問題意識から出発し、語の意味を「その語がどのような状況でどのような意味で用いられるか」までも含めて記述するためには語を超えたパターンを意味記述の単位としなければならないこと、そしてこの考え方はとりわけ前置詞のような機能語に関して効果的であることを示したつもりである。この立場に立つと、パターンの意味は記述されても語自体の意味は記述されないことになるが、3.2.5節等で述べたように、少なくとも前置詞に関してはそれで構わないと本稿では考える。母語話者は1つ1つバラバラになった語に接し、それぞれの語の意味を覚えるのではない。実際に使用される「語のまとまり」に接し、言語を習得していくのである。

#### 注

\*本稿は、日本英語学会第24回大会（2006年11月4日、於東京大学本郷キャンパス）で開催されたワークショップ「前置詞の意味・助詞の意味」において筆者が行った「前置詞への用法依存アプローチ」と題する発表に基づきつつ、大

幅な修正を加えたものである。

- 1) ここでいう「フレーム」とは Fillmore (1982) の **frame** のことであり、Langacker (1990:5ff) の **base** とほぼ同義である。
- 2) これは言い換えると、過度に抽象的なスキーマは過剰生成を許してしまうということであり、正しい意味記述と言えないことになる。
- 3) Tyler and Evans (2003) のみならず、語の意味を「プロトタイプの意味とその拡張」で捉えようとする認知言語学的研究はいずれもこの問題を抱えていると言えよう。
- 4) 「コロケーション」は「複数の語が並んだもの」という意味で用いられることが多い。逆に「構文」は「語とは独立にする、語の並び方の慣習的な決まり」という意味で用いられることがある。この点を考慮し本稿では Hunston and Francis (2000) にならって「パターン」という語を用いることにする。具体的には(3)に見るような、例えば〈PERSON〉のような語の上位概念を含めた、複数の語のかたまりを指す。
- 5) この問題については Lakoff (1987: Part II) が詳細に論じている。
- 6) 抽象度を上げずにパターンを重視すべきだという考えについては黒宮 (2010) も参照。また Sinclair (1991)、Hunston and Francis (2000)、Barlow (2000)、Stubbs (2002) 等も参照。
- 7) 厳密には **fight with** 〈PERSON〉は多義(「〈人〉を相手に戦う」「〈人〉とともに戦う」)であるので、さらなる条件を加える必要がある。
- 8) 脳の負担が増えることを経済的でないと断ずるのはあまりにも偏った考え方であろう。例えば人間の骨格や筋肉の構造はてこの原理から見ると大きな力を出さなければ動かせない作りになっている。これを力だけに着目して論ずれば不経済ということになってしまうが、実際問題として人間の体はそうのように作られている。体を動かすために大きな力が必要となるのは確かだが、その代わり素早く動くことが可能となる。つまりそこには力と速度とのトレードオフがあるのであって、その全体を見る

ことなく経済性を論ずることは無意味である。筆者は言語もこれと同様だと考える。すなわち、大量の言語表現を記憶するのは脳に負担を掛けることになるが、その代わり早く話すことが可能となるはずである。我々の会話は、誰かが発話し、それを聞いて数分間考えて返事をし、相手も数分間考えてまた返事をする、という調子で進むのではない。テンポよく会話が進行していくのは大量の言語表現を記憶しているおかげだと筆者は考える。

- 9) なお、ここでは母語話者における心的実在性をもったものとしてのパターンについて考えているが、外国語教育や辞書の記述において「どの程度のレベルのパターンを教える（記載する）べきか」という問題を考えるととなると話は別である。そのような目的のためには“with <CLOTHING>”のレベルのパターンを教えれば（記載すれば）十分であって、“with <CAP>”のレベルのパターンは不要かもしれない。
- 10) こうした様々なイメージ、およびそれらと結び付いた抽象度の低いパターンは、前置詞の意味におけるある種のプロトタイプ属性（Taylor 1995, Lakoff 1987）の役割を果たしていると考えていいかもしれない。
- 11) Pustejovsky (1995:29ff) を参照。なお正確には Pustejovsky は“sense enumeration lexicons”と呼んでおり、これは「人間の心的辞書を語義の数え上げをしているものとして捉える、そのような考え方に基づいた心的辞書」という意味である。
- 12) 例えばもし in に違和感を覚える読者がおられたら、“I’m interested in linguistics.” はなぜ in となるのか考えてみられるとよろしいかと思う。それなりに理由付けができると思うが、それと同じ理由により (7) に in を用いてもおかしくはない、ということになるのではないだろうか。
- 13) with の最も基本的な用法は「A（名詞）が B（名詞）とともにある」のように 2 つの名詞の間の関係を示すことであろう。そうした観点から (7) を眺めると (7) の with は 2 つの名詞 something と my computer との関係

を示しており、一方で形容詞 **wrong** は **something** を修飾しているだけで **with** とは直接の関係はない、と考えることも可能かもしれない。しかし (7) とほぼ同じ意味で “Something is wrong with my computer.” とも言えることから考えても、(4b) で見たように **with** は **wrong** と強く結びついているというべきであろう。となるとこれは **with** に関してかなり特異な用法だということになる。

## 参考文献

- Atkins, Sue, Charles J. Fillmore, and Christopher R. Johnson (2003), “Lexicographic Relevance: Selecting Information from Corpus Evidence”, *International Journal of Lexicography*, Vol.16 No.3, Oxford: Oxford University Press, pp.251-280.
- Barlow, Michael, (2000), “Usage, Blends, and Grammar”, in Barlow and Kemmer (eds.), pp.315-345.
- and Suzanne Kemmer (eds.), (2000), *Usage Based Models of Language*, Stanford: CSLI Publications.
- Fillmore, Charles J. (1982), “Frame Semantics”, Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin, pp.111-138.
- , Christopher R. Johnson and Miriam R.L. Petruck (2003), “Background to FrameNet”, *International Journal of Lexicography*, Vol.16 No.3, Oxford: Oxford University Press, pp.235-250.
- Goldberg, Adele E. (1995), *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (2006), *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford: Oxford University Press.
- Hunston, Susan and Gill Francis (2000), *Pattern Grammar: A Corpus-driven Approach to the Lexical Grammar of English*, Amsterdam: John Benjamins.

- Kuroda, Kow, (2000), “Presenting the Framework of Pattern Matching Analysis”, *Conference Handbook* 18, English Linguistic Society of Japan, pp.5-8.
- 黒田航、中本敬子、野澤元 (2005)、「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」、『認知言語学論考』No.4、ひつじ書房、pp.133-269.
- 黒宮公彦 (2006a)、「多義性と文脈」、『日本認知言語学会論文集』第6巻、日本認知言語学会、pp.549-552.
- (2006b)、「前置詞への用法依存アプローチ」、ms、日本英語学会第24回大会.
- (2007), “A Usage-based Approach to Prepositions”, Workshop Report, *JELS* 24, English Linguistic Society of Japan, p.253.
- (2010)、「〈移動〉の意味はどこから来るのか — off NP をめぐって」、『日本認知言語学会論文集』第10巻、pp.405-415.
- Lakoff, George (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1990), *Concept, Image, and Symbol*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- (2000), “A Dynamic Usage-Based Model”, in Barlow and Kemmer (eds.), pp.1-63.
- Pustejovsky, James (1995), *The Generative Lexicon*, Cambridge: The MIT Press.
- Sinclair, John M. (1991), *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford: Oxford University Press.
- (1996), “The Search for Units of Meaning”, in John Sinclair (2004), *Trust the Text*, London: Routledge, pp.24-48.
- Stubbs, Michael (2002), *Words and Phrases — Corpus Studies of Lexical Semantics*, Malden/Oxford: Blackwell Publishing.

Taylor, John R. (1995), *Linguistic Categorization*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press.

Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans (2003), *The Semantics of English Prepositions*, Cambridge: Cambridge University Press.

#### 引用文献

TCP = Charles M. Schulz, *The Complete Peanuts: 1989 to 1990*, Seattle: Fantagraphics Books, 2013.



## A Collocation-based Approach to Prepositions

Kimihiko Kuromiya

Traditional researchers of English prepositions have a tendency to consider the purpose of their research as clarifying the core meaning of a preposition. This is often of little practical value to learners of English because it is too broad and also too abstract to specify the exact sense of the preposition in accordance with its context. This article builds on a usage based model (Langacker 1990, 2000) and proposes that attempts to describe the meaning of a preposition should also describe the collocation, i.e. the entire phrase, clause or sentence in which the preposition is embedded. Since a preposition is what combines a noun with another word (often a verb), information about what kind of word comes before or after the preposition, and the meaning of the entire phrase or sentence should be part of the preposition's meaning. We will see that collocation information is essential in describing the meaning of a preposition and that it is more important, especially to learners of English, than a preposition's core meaning.